

国民から必要とされる存在に

群馬県病院薬剤師会会長
SUBARU健康保険組合太田記念病院薬剤部長
原 佳津行 Katsuyuki HARA



総務省が本年9月に公表した人口推計によると、日本の総人口は1億2,376万人で、そのうち65歳以上の高齢者は3,625万人（29.3%）と、去年より2万人増え過去最多になりました。75歳以上は2,076万人で、いよいよ来年2025年には、団塊の世代（1947～1949年生まれ）のすべてが75歳以上となり、超高齢社会が引き起こす社会保障費の増大や労働力不足等の諸問題、いわゆる2025年問題が引き起こされるとされています。

一方で、日本の総人口は2008年の1億2,808万人を境に減り続けて少子化も進んでおり、本年9月の人口推計では15歳未満の子供は1,385万人（11.2%）と、去年より34万人減少しました。

また、18歳人口においては1992年の205万人をピークに減少し、2009～2020年までは横ばいで推移していたものの2021年（114万人）から再び減少局面に突入しています。文部科学省による大学進学者数の将来推計では、これまで18歳人口が減少し続けるなかでも大学進学率は上昇し、大学進学者数も増加傾向にありましたが、2026年以降は18歳人口の減少に伴い、大学進学率が上昇しても大学進学者数は減少局面に突入すると予測しています。同省の大学進学者数の推計では、2026年の65万人が2040年には51万人に減少するとしており、その数は薬学部がまだ四年制で46学部（入学定員約8,000人）であった1991年当時の大学進学者数（52万人）に相当します。同省は各都道府県別の大学進学者数も予測しています。群馬県では2021年には8,971人であった大学進学者が2040年は5,833人に減少するとしています。2040年には私を含めた団塊世代ジュニアのすべてが高齢者になる2040年問題が発生しますが、一体、このなかから何人が薬学部に進学するのかと不安になります。

2021年に厚生労働省の検討会において示された薬剤師の需給推計では、薬剤師の総数は、将来的には薬剤師の業務が地域における役割の重要性の増加に伴い需要がより増加すると仮定したとしても、供給が需要を上回り、薬剤師が過剰になると示されました。しかしながら、薬剤師の従事先には業態の偏在や地域偏在があり、特に病院薬剤師が不足していることは、我々病院薬剤師にとっては周知の事実であったと思います。

2025年以降、少子高齢化の進展による急激な生産年齢人口の減少により、医療・介護分野のみならず、すべての産業において人材不足に陥るなかにおいての人材確保は簡単ではありません。

現在、日本病院薬剤師会と都道府県病院薬剤師会は、厚生労働省や都道府県薬務主管課をはじめ、政界や薬学教育界等、病院薬剤師にかかわるすべての関係者と連携して、病院薬剤師確保に取り組んでいます。何より重要なのは国民から病院薬剤師が必要とされることです。そのためには、一人ひとりの病院薬剤師が、これまで以上に顔の見える病院薬剤師として活動していくことが望まれます。